
蘇る『戦士』と『悪魔』

Hiro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蘇る『戦士』と『悪魔』

【Nコード】

N7242Y

【作者名】

H i r o

【あらすじ】

ワルプルギスの夜との決戦に勝利して魔法少女の戦いは終わった。誰一人欠ける事無くハッピーエンドを迎えた少女達。

しかし、新たな脅威が近づきつつある事は誰も知らない。

注意）この小説は『絶望の終焉／仮面の戦士と魔法少女』の続編です。

プロローグ（前書き）

ワルプルギスの夜との戦いを終えて、確かな幸せを噛み締める少年少女達。

これからの見滝原で何が起きるのかは誰も知らない。

蘇る『戦士』と『悪魔』

始まります。

プロローグ

ワルブルギスの夜との決戦から三日後、決戦の場所に居た全てのメンバーは見滝原総合病院に入院していた。

あの戦い以降、暁美ほむらや巴マミ、佐倉杏子の三人の魔法少女は、美樹さやかと同じように魔法少女の力を失っていた。

上条当麻も、仮面ライダーに変身出来なくなっていた。

実質、戦えるのは仮面ライダーWと仮面ライダーアクセルのみだったが、魔女との戦いを終えた彼女達にとって戦う力は必要なかった。

力を失ったのは、見滝原市に平和が訪れたからだと考える少女達。

現在の見滝原市には、ドーパントの存在といった問題が残っているが、財団？の切り札と思われる仮面ライダーエターナルや仮面ライダーAWを倒したことから、それほど危険視される様な問題でも無かった。

ちなみに、仮面ライダーAWに変身していた少年は左翔太郎達に保護されて、現在は彼等と共にいる。

入院していた彼等に対して、鹿目家の面々と鹿目まどかと美樹さやかの親友である志築仁美が頻繁にお見舞いに来ていた。

退院したら、志築仁美の家でパーティーをするという約束をする一同。

ワルブルギスの夜は仮面ライダー？のマキシマムドライブによって、本来の人間に戻った。

しかし、少女は身寄りが無いらしく、バマミと一緒に暮らすことになった。

ちなみに、佐倉杏子もバマミと一緒に暮らすことになり、また彼女は鹿目まどかと美樹さやか、バマミと上条当麻に説得されて見滝原中学校に通うことが決定した。

退院してから、忙しくなりそうだが少女達はそのことを純粹に喜んでいた。

プロフィール（前書き）

主「本当に今更ですが彼等のプロフィールを始めさせていただきます」

上条「幾らなんでも適当じゃないか？このプロフィール…」

主「本当にすいませんでしたあ！！」

プロフィール

上条当麻

見滝原中学校の三年生

相変わらずの不幸体質だが、フラグ体質も健在

魔女との戦いの際には、仮面ライダー？に変身して戦っていたが、現在はその力が失われている模様

鹿目まどか

見滝原中学校の二年生

心優しく友達想いの少女

他人の為に身体一つで戦う上条に憧れを抱いている

美樹さやか

見滝原中学校の二年生

元魔法少女の一人

失恋して自分の道を見失っていたが周囲の努力により元気を取り戻した

巴マミ

見滝原中学校の三年生

元魔法少女の一人

自分を何度も助けてくれた上条に淡い想いを抱いている

佐倉杏子

見滝原中学校の二年生

元魔法少女の一人

決して折れる事無く他人を救う為に戦い続ける上条に一種の憧れのようなものを抱いている

暁美ほむら

見滝原中学校の二年生

元魔法少女の一人

まどかを救ってくれた上条に恩を感じている

志築仁美

見滝原中学校の二年生

鹿目まどかと美樹さやかの親友

不良から助けてくれた上条に好意を持っている

左翔太郎

鳴海探偵所の探偵

肉体労働担当

中身は良くも悪くもお人好しの三枚目であり、ハーフボイルド呼ばわりされることもある

仮面ライダーという名前に誇りを持っている

フィリップ

左翔太郎の相棒

頭脳労働担当

『地球の本棚』にアクセス出来る唯一の人間

頭脳労働担当だが戦えないというわけではない

照井竜

風都署の刑事

若くして警視に就任するなど非常に高い能力を備えている

以前は、復讐の為に仮面ライダーアクセルとして戦っていたが、翔太郎達の尽力により風都を守る存在として活躍している

ちなみに、鳴海亜樹子とは結婚している

鳴海亜樹子

鳴海探偵事務所の所長

照井竜とは結婚しているが、見滝原では旧姓である鳴海亜樹子を名乗っている

天道真

大道克己のクローン

黒い仮面ライダーエターナルに変身して、上条達と死闘を繰り広げていたが、彼等によって倒される

その後、翔太郎達の提案により鳴海探偵事務所の一員となる

第1話 平和

病院に入院してから数日が過ぎて、ワルプルギスの夜との戦いの場
にいたメンバーは全員無事に退院した。

ちなみに、上条が病院内でフラグを乱立したことはまどか達には知
られていない。

病院を退院したメンバー達は早速、志築仁美の実家に向かった。

ちなみに、仮面ライダーAWだった少年とワルプルギスの夜だった
少女も彼等に同行していた。

仁美の実家に到着した一同は…

上条「でけえ…」

翔太郎「お嬢様だとは思ってたけどな…」

亜樹子「すごい…」

さやか「相変わらず大きいわね」

志築仁美の実家の大きさに圧倒される一同。

鹿目まどかと美樹さやかは、彼女の実家に訪れたことがあるのだが、
未だに慣れていないようだった。

まどか「とりあえず仁美ちゃんに来たことを伝えようか」

まどかはそう言ってチャイムを鳴らす。

仁美「ようこそおいで下さいました」

さやか「おつす」

まどか「こんにちは」

仁美に案内されて屋敷の中に入る一同。

仁美「皆さんには言いそびれていたのですが…」

そう言つて仁美が一同をとある場所に案内する。
そこには…

さやか「これつて…！？」

まどか「仁美ちゃんが話してた巨大クワガタ！？」

仁美が一同を案内した場所には巨大なクワガタがいた。
一般的なクワガタとは明らかに異なる大きさのクワガタ。

翔太郎「何だ…これ…？」

上条「クワガタ？」

照井「ドーパントではないのか？」

仁美「この子は前に私を助けてくれたんです」

フィリップ「このクワガタが？」

仁美「ええ。以前、怪人に襲われたのですが…」

まどか「仁美ちゃん大丈夫だったの!？」

さやか「怪人ってドーパントじゃ…」

仁美「このクワガタさんがその怪人を撃退してくれたのです」

上条「そうだったのか…」

翔太郎「フィリップ。このクワガタはドーパントなのか？」

フィリップ「分からないけど…このクワガタは単なる巨大なクワガタじゃないみたいだ」

照井「それにどことなく機械的だからな」

亜樹子「でも…仁美ちゃんを助けてくれたってことは、このクワガタはきつと良い子だよ」

仁美「そうですね」

彼等に巨大なクワガタを紹介した仁美は、パーティの準備が出来ていると話して彼等をパーティ会場に案内した。

会場に到着した一同は、並べられた料理を見て溜息をついた。

上条「すげえ…」

マミ「凄く気合が入っているわね…」

杏子「腹減った…」

仁美「どうぞ。ご自由にお食べください」

さやか「待ってました!!」

仁美の言葉を待ってたといわんばかりに、食事にありつくさやか。そんな彼女を見ていた一同も、すぐさま食事にありついた。

専属シェフの作る料理は非常に美味しいらしく、招待された一同は満足していた。

高級な料理を食べようとしていた上条だったが、凄まじい速度で食べる杏子に料理を奪われていた。

上条「不幸だ…」

仁美「あの…上条さん…」

上条「ん?どうしたんだ?」

仁美「まどかさん達を守って頂きありがとうございました」

上条「俺はまどか達を守れてなんかいなかったさ」

仁美「え?」

上条「あいつらが無事だったのは、あいつらが強かったからだよ」

仁美「…そうですね」

上条と話す仁美の顔が若干赤いことには、少年が気付く筈もない。少年と少女が話している頃、暁美ほむらは鹿目まどかと美樹さやか

に誘われて料理を食べていた。

少女は自分がもう魔法を使えないことを実感する。しかし、最早時間を繰り返す必要など微塵も無く、戦う必要が無いのだと安堵するのだった。

天道真と『AW』だった少年、ワルプルギスの夜だった少女も並べられた食事を食べていた。

パーティが終了してそれぞれの自宅に帰った一同。

巴マミと佐倉杏子は自宅にマンションに向けて帰って行った。

マンションに到着してワルプルギスの夜だった少女を寝かしつけた二人は、今日の出来事について話していた。

杏子「いやー今日は楽しかったな」

マミ「ふふ…そうね」

杏子「それにしても、あたしも明日から女子中学生か…なんか緊張するな…」

マミ「大丈夫よ。私や上条君もサポートするから」

杏子「ありがとよ。そーいやマミ」

マミ「何かしら佐倉さん？」

杏子「その佐倉さんってのやめてくれねえか？何か他人行儀でむず痒いんだよ」

マミ「え…じゃ…じゃあ杏子さんでいいかしら？」

杏子「さん付けがなんとも言えないけど…まあいいか」

苦笑いする二人だったが、突然佐倉杏子が巴マミにある質問をする。

杏子「マミ…これからお前はどつする？」

マミ「え？」

杏子「ドーパントとの戦いだよ。あたし等は魔法少女の力を失ったけど…」

マミ「私は…これからも戦おうと思う」

杏子「今のあんたに出来ることなんてたかが知れてるぞ？」

マミ「それでもよ。私はドーパント達から皆を守りたいから」

杏子「そっか…」

マミ「そういうアナタはどうなの？」

杏子「あんたと同じだよ」

マミ「そう…」

杏子「あたしもあんたも戦いの経験は豊富だから、それなりに戦えるだろうさ」

マミ「そうね…ってもうこんな時間ね…そろそろ寝なくちゃ…」

杏子「そうだな」

佐倉杏子と巴マミが今後の予定について話している頃、美樹さやか
は自室のベッドに入って今日の出来事を思い出していた。

さやか「（今日はとても楽しかったな） 杏子も明日から学校に通
うらしいし」

魔法少女の存在を知ってから、様々な出来事があつたが、こうして
『今』を迎えられていることが何よりも喜ばしかった。

さやか「（それにしても上条さん…仁美と楽しそうに話して…）」

志築仁美と楽しそうに話している上条当麻の姿を思い出して、若干
不機嫌になる美樹さやか。

さやか「（…何考えてんのよあたし!?別に上条さんが誰と付き合
おうが関係ないし…）」

慌てて自分の考えを否定する少女。

さやか「（とにかく!…とつと寝なきゃ!）」

その頃、警察寮に居る左翔太郎達は…

翔太郎「どうだフィリップ?」

フィリップ「やっぱりだめだ…検索しても当てはまらない…」

照井「あのクワガタも上条と同じ『イレギュラー』ということか?」

フィリップ「断定は出来ないけど、その可能性は高いだろうね」

亜樹子「上条君と同じで害はないのかな？」

翔太郎「それは分からないが…」

フィリップ「あのクワガタは何者かに作られた可能性が非常に高いだろうね」

照井「誰が何の為に？」

フィリップ「それは分からないよ」

亜樹子「ガジェットにしては大きすぎるし…」

巨大なクワガタの正体に全く検討がつかない一同は困り果てていた。

その頃、鹿目家では…

まどか「それでね…！」

知久「そんなことがあったんだね」

当麻「まどか…もうそろそろ寝ないと明日に響くぞ…」

父である知久に今日の出来事を話すまどか。

その様子を見ていた上条がまどかに注意していた。

鹿目まどかにとって、何気ない日々は待ち望んでいたものであり、それがようやく戻ってきた少女はテンションが上がっていたのだ。

まどか「もうこんな時間なんだ…」

知久「また明日聞くからね…」

まどか「うん…おやすみなさい…パパ…」

これからの生活に胸を躍らせる一同だったが、見滝原に忍び寄る危機には誰も気付いていなかった。

第2話 遭遇（前書き）

少しばかりお待たせしてしまい申し訳ございません。

それでは 蘇る『戦士』と『悪魔』 第2話始めさせていただきます。

第2話 遭遇

翌日、鹿目まどか達が登校している頃…

五代「此処は…？」

五代雄介は見滝原市の公園に居た。

彼は先程までの出来事を思い出していた。

未確認生命体第0号との戦いを終えて、二年が経ち、現在は外国に居たのだが、科学警察研究所の責任者である榎田ひかりから、ゴウラムが突然消えたという報告を受けて、一旦日本に戻った筈なのだが、日本に向かう船に乗っている時に一眠りして、目が覚めたら見知らぬ土地の公園に居たのだ。

ご丁寧に彼の隣には、専用のバイクであるビートチェイサーまであった。

五代「夢の中なのかな？」

公園の入り口で考え込んでいる彼の前を、一人の女性が通り過ぎる。

五代「すいませ〜ん！」

早乙女「私ですか？」

五代「はい！あの〜此処は何処なんですかね〜？」

早乙女「え…此処は見滝原…ですけど…」

五代「見滝原？…ありがとうございました」

早乙女「え…ええ…」

青年の前から立ち去る女性。

この町並みといい先程の女性といい此処が日本であることは間違いない。

しかし、見滝原なんていう名前は聞いたことは無い。

日本のみならず、外国も股に掛ける生粋の冒険家である五代雄介が知らない場所というのはあまりにも不自然だった。

船で寝ていたら知らない土地に居て、更に今の自分が居る場所は全く聞いたことのない土地であること。

あまりにも奇妙な体験をしている当の本人は…

五代「いやあ…こんな体験滅多に出来ないよ！おやっさんや一条さんに話す内容が増えたなあ！」

喜んでいた…

五代「せっかくだから色々この街を見て回ろうかな」

それから、彼はビートチェイサーに跨り移動を開始した。

『見滝原中学校』

青年が見滝原を観光している頃、見滝原中学校では鹿目まどか達の担任である早乙女和子は転校生の紹介を行っていた。

早乙女「転校生を紹介するわね」

杏子「佐倉杏子だ。よろしく頼むぜ」

転校初日ということもあり、佐倉杏子は少しばり緊張するかと考えていた鹿目まどかと美樹さやかだったが、どうやらその心配は無用だったらしい。

元々、他人に対して分け隔てなく接することの出来る少女だったということもあり、あっという間にクラスに溶け込んでいた。

本日は、佐倉杏子の転校初日ということもあり、昼食はいつも通り教室で取らずに、外で食べることに決めた。

上条当麻と巴マミの二人と合流した少女達は、外に向かった。

時折、男子生徒の殺気が含まれた視線が上条に突き刺さるが、少女達は誰一人気付いていないようだった。

上条「不幸だ…」

雑談をしながら、昼食を食べる一同。

まどか「何だか今日は早乙女先生の様子がおかしかったけど…」

さやか「卵が半熟かどうかについて話してなかったしね」

上条「卵が半熟かどうかってどういうことだ？」

仁美「以前、交際されていた方と目玉焼きの焼き加減で揉めて別れたことがあるらしく、よくその話をされるのですよ」

マミ「そ…そうなのね…」

ほむら「やっぱりこの時間軸でも同じなのね…」

杏子「そんな変な奴には見えなかったけどな…」

少女達が担任の先生について話している頃…

早乙女「クシユン！…風邪かしら？」

見滝原の見回りを行っている左翔太郎と照井竜。

魔女が出現しなくなって、現在の見滝原の脅威はドーパントのみだが油断は出来ない。

パトロールを行っている二人だったが…

翔太郎「照井…あのクワガタについて何か分かることはねえか？」

照井「俺に質問するな…ドーパントと異なる存在ということは明らかだが…」

志築仁美が面倒を見ている巨大なクワガタの正体が全く分からない。彼女の話を聞く限り、あのクワガタは危害を加える気は無いと考えられるが、何の為に存在しているのか見当もつかない。

しかし、地球の本棚にすら記載されていない事柄を知っている人間など居る筈もない。

諦めて見滝原の見回りを再開する二人。

その頃、授業を終えた少年少女達は帰宅中だった。

さやか「ねえ仁美」

仁美「はい？」

さやか「あのクワガタって何食べてるわけ？」

仁美「何も食べてくれないのです…」

まどか「ええ！？それって大丈夫なの？」

仁美「全く弱っている様には思えないのですが…」

マミ「苦手な物でもあったのかしら？」

仁美「色々与えてみたのですが…」

与えた食べ物について詳しく語る仁美。
その話を聞いていた上条は…

上条「クワガタどころか…人間ですら滅多に食えない物じゃねーか
…」

ほむら「そもそもあれを昆虫と定義するところから間違えていると
思っわよ…」

杏子「どうみても普通のクワガタじゃねーしな…」

クワガタの話をしながら、歩を進める一同。
そんな少年少女達の前に、不良が居た。

不良「最高だあ…これがあつたら俺は何でも出来る…」

不良は、ガイアメモリを取り出して自身の右腕に差し込む。

『コックローチ！…！』

ドーパントが出現する。

その姿はゴキブリを彷彿とさせるものであり…

さやか「きもい…」

まどか「ちよつと…」

仁美「ひ…」

非常に気持ち悪い姿だった。

襲い掛かるドーパントだったが…

ドン！！

ガン！！

銃声と、銃弾がドーパントにした音が響き渡る。

杏子「お前…まだそれ持ってたのかよ…」

ほむら「魔女が居なくなっただけとはいえ、この町は安全になったわけではないわ」

ハンドガンを持っていた暁美ほむらは、ドーパントに向けて容赦なく弾丸を叩き込む。

しかし、ドーパントの堅牢な装甲をハンドガンで打ち破れる筈も無く、少しずつ近づいてくるドーパント。

マミ「戦えるのは暁美さんだけとは思わないことね！！」

巴マミがドーパントに向けて、銃の様な物体を構えて発射する。

パン！！

銃口からエネルギー弾のような物体が発射されて、ドーパントの身体に直撃する。

さやか「マミさん…それって？」

マミ「フィリップさんに作ってもらったのよ。見滝原も安全というわけじゃないからって」

杏子「あたしも作ってもらおうかな」

さやか「ずるいよ杏子！」

まどか「わ…私も…」

上条「そんなこと言ってる場合か！」

ほむらとマミの攻撃により、激昂した『コックローチドーパント』は二人の攻撃を受けながらも、一同に向かって突進してきた。

マミ「なっ…！」

ほむら「危ない！」

まどか「ひっ…」

さやか「こっちに来るなあ！」

仁美「きゃああ！」

杏子「くそ！」

上条「ちくしょお！」

杏子は護身用のバットを取り出すが、それで追い払える程ドーパン
トは弱くない。

上条もまどか達の前に立つが、拳しか戦う手段がない少年にとって
今の状況は絶体絶命だった。

しかし…

ブオオオオオン！！

ドガア！！

ドーパントがバイクに跳ね飛ばされる。

そして、バイクから降りた青年は一同に声を掛けた。

五代「大丈夫！？」

少年少女達に声を掛けたのは、見滝原を観光中の五代雄介その人だ
った。

まどか達がドーパントに遭遇する少し前、五代雄介は見滝原を一通
り見ていた。

どうやら、自身の持っているお金が見滝原でも同様の通貨が用いら
れているらしく安堵する青年。

五代「それにしても…」

ある程度見滝原を見た彼は、この町が所々ヨーロッパを意識させる造りであると感じた。

五代「今夜は何処に泊まろうかな？」

そろそろ夕方になって来たので、今日の宿を探そうとしている彼だったが…

パン！！

突然、銃声が鳴り響く。

五代「え…？」

呆然とする彼だったが、すぐさま我に帰ると銃声が聞こえた方向に向けビートチェイサーを走らせた。

現場に到着した彼が見た物は、怪物と少年少女の集団だった。

二人の少女が怪物に対して、銃を発射しているが、怪物にはあまり効果があるようには思えなかった。

五代「あれは…どうして…！」

五代雄介は、目の前の怪物の姿を見て、かつて自分が闘っていた存在を思い出す。

多くの人の笑顔を奪い、命を奪い去った悪魔を。

あの怪物を放置していたら、多くの人が涙を流す。

五代雄介はビートチェイサーを怪物に向け走らせて、体当たりする。ビートチェイサーから降りた五代雄介は、集団の前に立っていた。

突然、現われた青年に動揺する一同だったが…

上条「危ないですよ！」

五代「大丈夫」

マミ「あのドーパントは危険なんです！」

ドーパントという言葉に聞き覚えがなかったが、目の前の存在が誰かの笑顔を奪うのならば、自分のやるべきことは唯一つ。

青年は、自分の腰に手を当てて念じる。

最後の戦いを終えた青年は、この力をもう二度と使わない筈だった。未確認生命体第0号との戦いで破損した物が、修復しているのかは定かではなかったが、彼は強く念じた続けた。

しかし、五代雄介の行動は思わぬ存在により中断されることになる。

翔太郎「おらあ！！！」

照井「はあ！！！」

二人の青年がドーパントに蹴りを入れる。

上条「左さん！！！」

まどか「照井さん！！！」

五代「え……！？！」

予想外の乱入者に動揺する五代雄介。

翔太郎「油断も隙もあつたもんじゃねえな」

照井「全くだ」

そして、二人はそれぞれ、ダブルドライバーとアクセルドライバーを腰に着けて、ガイアメモリをドライバーにセットする。

『サイクロン！！ジョーカー！！』

『アクセル！！』

翔太郎＆フィリップ「変身！！」

照井「変身！！」

二人の身体が変質して、全く異なる姿となる。

五代「ええ！？」

仮面ライダーWと仮面ライダーアクセルがその場に現われる。

自分が知っている存在とは、異なる点が所々あるが、それでも二人の姿はある戦士に酷似していると、そう思わずにはいられない五代雄介だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7242y/>

蘇る『戦士』と『悪魔』

2011年11月30日12時47分発行